
呪われたもの

ありま氷炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呪われたもの

【Nコード】

N7596X

【作者名】

ありま氷炎

【あらすじ】

女性呪術師の藍は2年ぶりに師匠で呪術司の典を助けるため、宮に戻る。典と帝は救ったものの自分自身に呪いがかかり、絶世の美女になってしまう。美女から元の姿に戻るため、藍は強と共に東の緑森国へ向かう。帝を狙う陰謀にも巻き込まれ藍は元の姿に戻ることはできるのか？

気まぐれ連載です。ブログと同時更新。

2年ぶりに宮へ

「はあ……」

呪術師・藍は本日何度目かのため息をつく。そして茶色の布袋に衣服など詰めていく。

決めたことだ。

呪術部 宮を出る。

呪術部で習うべきことはすべて習得した。

この場所に未練はない。

藍は15歳のときにその呪術の腕を見込まれ、宮にある呪術部に入った。

呪術とは自らの気を操り、相手を呪いかける術であり、気を使い相手を物理的に攻撃もできる戦闘にも長ける術だった。

有能な呪術師は宮にきて更に修行を積み、帝を呪いから守り、国の運営に力を貸すため、呪術部に集められた。宮においてその地位は華やかなもので、藍の両親もそれを期待して藍を宮に見送った。

藍は茶色の真っ直ぐに伸びた髪を後ろで結び、意志の強そうな青い瞳を持った小柄な可愛らしい女性であった。しかし、他の女性呪術師のように着飾ることがなく、いつも同じ白地の着物に、青い羽織りをつけており、その可愛らしさに気づくものは少なかった。

「やっぱり行くのかい？」

呪術司の典は大きな布袋を背中に背負い、部屋を出て行くことする藍にそう声をかけた。

藍はまさか典がそこにいるとは思わず、驚いて典を見つめる。

典は呪術部をつかさどる呪術司で、藍の師匠だった。宮の美しい呪術司と呼ばれており、整った卵型の顔に透き通るような緑色の瞳。見るもののため息をつかせるほどの美しい金色の髪は無造作に肩にかかるまで伸ばされていた。

藍は典の下で3年修行を積んだ。その優しげな容貌と異なり、指導は厳しく、3年のうち、集められた呪術師で残ったのは5人だった。

呪術師仲間と過ごすのは楽しかった。しかし藍は宮の生活が苦手だった。宮の人々は表の顔は美しいがその腹に抱えるのは醜い思いばかりだった。帝を呪いから守るのが呪術部の呪術師の主な仕事であつたが、帝の元に集うものたちが己の欲望のために、呪術師に呪いを頼むものも多かった。

「申し訳ありません。田舎ものの私にはやはり宮の生活はむずかしいです」

藍はぺこりと頭を下げると、扉に寄りかかり、やさしげな笑みを浮かべる典の前を通りすぎようとしたり。

「藍！」

典はそう名を呼ぶと藍の腕をつかんだ。

「君がいなくなると仕事量が半端になく増えるんだ。いてくれないか？」

緑色の瞳は藍を捉えるとそう懇願した。

「……典様。部には私以外にも明様やたくさんのお術師がいます。

心配しなくても」

藍がそう答えると典はため息をもらす。

「君くらいの能力じゃないから、役にたたない」

役にたたないって。

あいかわらず容赦ない言葉だと思いながら、藍は典を見つめ返す。

「……典様。それを言ったら明様が怒りますよ」
すると典は苦笑する。

「正直なことをいったままでだ。私はただ美しいだけものよりも、能力のある者が側にいたほうがいい」

すみませんね。美しくなくて。

でも、美しいだけって、明様が聞いたたら泣きますよ。

「典様」

藍は苦しい典を見つめ、その名を呼ぶ。

「藍。お願いだ。行かないでくれ」

まったく、愛の告白みたいだ。

でもその手には乗りません。

典が必要なのは藍のその力だということを藍は十分にわかっていた。

典が誰かを好きになったり、いれこんだりするのを見たことがなかった。

最初はその言葉に期待し、宮を出ていくをやめたりしたが、5回目となる今日は騙されるつもりはなかった。

「典様。がんばってください。私がいなくなればみんなちゃんと仕事をしますよ。きっと。だから大丈夫です。田舎から応援してますから」

呪術司に言う言葉じゃないと思いつつも、藍は笑顔を作り、つかまれた手を振り払う。そしてくるりと典に背を向けると部屋を出て行く。

「藍！」

「典様、お元気です」

藍はひらひらと手を振ると呪術部の建物を出て行った。
「藍！」

「はい！」

そう勢いよく返事した自分の声で藍は目を覚ました。そして自分が森の中で昼寝をしてしまったことに気づく。

宮から帰ってきてきて2年ほどたっていた。

「夢え？」

村に帰ってきて初めてみた宮での夢だった。

「まさか、なんか典様にあつたのかな？まさか、あの典様が…」

夢が暗示することもあるという言葉を典から聞いたことがあったが、無敵を誇る典が危機に陥るなど藍には想像できないことだった。

「さあ、仕事、仕事！母さんに怒られる！」

藍はうーんと背伸びをすると、店に戻るために勢いよく立ち上がった。

宮から村に帰ってから、両親が経営する呪術店を手伝った。さすが宮帰りということその噂は広まり、両親がほそぼそとやっていた店はたちまち人気の店になった。店に押しかけるのは人に呪いをかけてほしい人や、呪いを防ぐ護身具を求める者たちだった。

「藍、あんたどこいったの？」

店の扉を開けに入ったとたん、母親がその声をかけてきた。

「どこ行って…」

藍は返事を返そうと顔を上げる。そして目の前に立ちふさがる男を見て目を疑った。

「……強様?!」

それは宮で警備兵をしていた強だった。強は典の親友でよく呪術部に姿を現していた。そのため藍も何度か強と会話したことがあつ

たことを覚えていた。会話といつても典を介したものでどんな会話をしたのか覚えてないほど、実のある会話ではなかった。

強の姿は2年前と変わっていなかった。変わったといえば、鎧を着ていないことくらいだった。外出用の紫の着物を羽織り、褐色の肌に茶色の瞳、後ろの方でまとめた長い黒髪は藍の母でなくともうつとりするような男前であった。

「藍、お前、やっぱりこの人知り合いなのかい？店で待たせてくれと言われて、どうしたものかと思ってただけど」

藍の母はそう言いながら、驚いた顔をしている藍と、渋い顔をして店の真ん中に立つ強を見比べる。強から、藍とは顔見知りで、急ぎの用があるから店で待たせたほしいといわれ、とりあえず店内で待ってもらっていた。半信半疑の母親だったが戻ってきた娘の様子を見て納得した。

「藍殿。久しいな。だかすまない。挨拶してる時間がないんだ。典が…呪術司が呼んでる。緊急だ。悪いが一緒に来てくれ」

「……緊急って？」
強の切羽詰った顔を見て、藍は自分の心臓が跳ね上がるのがわかった。そして夢を思いだす。

やっぱり典様に何かあったんだ。

「今は言えない。とりあえず一緒にきてくれ」
強にそう言われ、藍は仕方なくうなずき、強とともに宮に向かうことになった。

かけられた呪い

藍の国は帝が支配する国であった。

国の中心は宮京と呼ばれ、帝が暮らす宮を中心に栄えていた。国の決定はすべて宮で行われ、宮京を囲んだ4つの地区、北の紅花国、東の緑森国、西の碧雲国で、南の黄土国はその決定にただ従って動いていた。

建国してから支配下にある4つの国は宮の強力な軍事力、呪術部を恐れ、内乱を起こすことなく国全体は平和に保たれていた。

しかしふいにその平和が破られた。

帝に呪いの攻撃が加えられた。

通常の呪いは宮に張った結界や、典の力で弾くことができた。しかし、典の力をもつてしてもその呪いは強力で跳ね返すことができなかった。そして今、典は持てる力すべてを使い、結界を張り呪いから帝を守っている状態であった。典がその場を動けば結界が消える。しかし呪いが消える気配はなかった。そこで典が強に頼んだことは藍を宮に連れて来ることだった。

「なんで私なんですか？」

強の背中に掴まりながら、藍がそう尋ねる。強は馬を飛ばして宮から離れた、藍の実家の紅花国にきていた。

「他の者じゃ対処できなかった。典はもう君以外に頼めるものがないと言っていた」

強は手綱をつかみ、馬を走らせながらそう淡々と答える。

私が最後の希望か…

呪い返し、典と共に何度かやったことがあった。

典が呪いを結界で食い止めてる間に、その気を消滅させる。

確かに他の者ではむずかしいかもしれないなかった。

「でも最近、呪い返しの大い奴はしてないんですけど…」

「悪いが君に選択肢はない。典だけでなく、帝の命もかかっているのだ」

「じゃあ、飛んでいきましようか？」

「？」

ふいに言われた言葉に強はぎょっとして馬を止める。

藍は馬からぼんと降りると、馬の上の強を見上げる。

「馬で宮に向かえば、2刻かかります。飛んでいけば半刻でつくと思います」

「…そうか」

強はそう答えながら馬から降りた。

正直、典が飛んだ姿は見たことがあったが、自分が飛ぶとなると違った。

「強様とあるものが怖いんですか？」

藍は強の顔が強張ったのを見て思わずそう尋ねる。強は勇敢なる戦士として宮で一目置かれていた。その強がそんな顔をするのがおかしかった。

「…そんなことはない」

「じゃ、手を貸して下さい。馬はすみません。あきらめてください」

藍の意志の強そうな青い瞳を向けられ、強は仕方なく手を差し出す。藍は手を掴むと何も言わず飛び上がった。

「?!」

浮遊感が体を包み、強は自分の顔が青ざめるのがわかった。

「怖がらないでください」

「怖くなどない」

藍は強の答えに思わず笑みを浮かべる。

「何がおかしい？」

「いや、別に……。さ、強様^{キョウサマ}、飛ばしますよ。典様^{テン}といえ、早くしないと大変なことになりますから」

「典^{テン}、大丈夫か？」

帝は寢室から体を起こし心配気に典^{テン}を見上げる。

「大丈夫です」

典^{テン}は脂汗をかきながらそう答えた。

実際のところ大丈夫ではなかった。辛うじて帝に呪いが届く前に止めることができたが、呪いが意外に強力で弾き飛ばすことができなかった。

呪術部から何名かの呪術者が来たが、典^{テン}の助けになることはなかった。

そこで浮かんだのが、2年前に宮を出て行った藍^{ラン}だった。

可愛らしい女性でその姿に似合わず、甘えのないその気は典^{テン}を唸らせることもよくあった。

宮を出るといっのを何度もひきとめたが、とうとう2年前に出て行ってしまった。

この2年大きな呪いが宮を襲うことはなく、典^{テン}は藍^{ラン}の助けを必要としなかった。

しかし、今回はどうしても藍^{ラン}の助けが必要そうだった。

強^{キョウ}に頼み、藍^{ラン}を連れて来るように言って3刻が立とうとしていた。

体がきしみ始め、呪いを弾く結界が崩れ始めようとしていた。

まずいな…

帝に不安を与えないように笑顔を作りながら、内心、典テンは焦っていた。

「典様！」

ひさびさに聞いた元気な声に典テンはほっとするのがわかった。

「何者だ！」

窓からふいに入ってきた藍ランを見て声を荒げた警備兵だが、側に隊長キョウの強キョウの姿を確認して構えた剣を降ろした。

「藍ラン、来てくれたんだ。ありがとう」

「どういたしまして」

藍ランはぺこりと典テンに頭を下げた後、奥にいる男に気づいた。

黒髪に黒い瞳、真っ白の肌の華奢は男がベッドの上に座っていた。その場所、色彩から帝であることがわかる。

寝室には帝と典テンのほか、数人の警備兵がいた。強キョウは船酔いではなく、飛び酔いになったようで、顔を悪くし、警備兵と共に壁に控えていた。

「帝様、紅花国の藍ランです」

藍ランはとりあえず典テンの横から顔を出し、寝台の帝に対し頭を垂れる。

「ごくろうである。宮から出たというのにすまないな」

帝は藍ランを見ると微笑みを浮かべた。

「そんなこと、恐れ多いです」

帝にそう言われ藍ランはふかふかと頭を下げた。

帝さんって悪い人じゃなさそうだ。

ま、悪かったら国が滅んでるか。

藍ランがそんなことを考えていると声がかかった。

「藍。悪いけど、呪いを先に返して貰ってもいいかい？」

「そうでしたね。じゃあやります」

藍は帝に再度頭を下げると、典に視線を向けた。その手に真っ黒は気が絡みついていていた。

「かなり強力そうですね」

「それはそうだ。この私のはじけ飛ばせないんだから」

「そうですね」

やっぱり偉そうな人だなと思いつつながら、藍は心を落ちつける。

そして手の平に気を貯め始める。

「いきます！」

気をためたところでそう声をかけ、その黒い気に自分の気をぶつける。

衝撃音がし、光が弾ける。

典は黒い気から解放され、ほっとその場に座り込む。

しかし、煙から現れた藍の姿をみて、目を見開いた。

「……藍。残念ながら君に呪いがかかったようだ」

典の言葉と視線に、藍は自分の姿を確認する。そして、自分が別の姿、別の女性になっていることに気づいた。

「え？元に戻る方法？どうして？」

典はにこにこつと笑って、そう聞いた。

呪いを弾き、帝の安全がわかってから、典は再度境界を張り直した。そして藍を連れ呪術部の呪術司部屋に戻ってきていた。

「どうしてって、こんな姿で村に帰れないですよ。戻す方法教えてください！」

「……いや。ご両親も喜ぶと思うよ。今なら国で一番の美女だと思うけど」

「!!!」
藍は典をぎろりと睨みつける。

典の言葉通り、変化した姿は、それはそれは美しい女性体だった。青い瞳に波打つ金色の髪の毛、そして美しい肢体：

宮内を歩いて、呪術部に戻る途中、振り返らない者はいなかった。

そう確かに、国一番の美女かもしれない。
今なら……

でも、私はそんなものに興味はない。

鼻が低くても、目が小さくても、胸がなくても、前の姿の方がよかった。

「戻る方法教えてください！教えないと典様、私が全身全霊をかけて呪いますよ！」

藍の言葉に典の顔が引きつる。

通常人に自分の名前の書体を教えてはいけない。

呪いに使われる可能性があるからだ。

しかし、典の名前の書体はあることがきっかけて藍にばれていた。

「……しょうがないな。いいよ。教えてあげよう。多分この呪いは東の呪術師・賢の仕業だ。あいつがしそうなことだ。多分私が防ぐと
思っ、かけてきたのだろう」

「北の呪術師・賢^{ケン}…。その人に会えば、呪いを解いてもらえるんですね！」

「多分ね」

「多分ってなんですか！」

「彼は気まぐれだからね。もしかしたら代償を取られるかもしれない」

「代償？」

「一晩お付き合いますとか…」

「！嫌です！典様^{テン}、一緒に行って頼んでください。お願いします！」

「だめだ。私は宮を出れない。あー強^{キョウ}を連れていくといい。あいつならなんとか賢^{ケン}に頼めるかもしれない」

「強様^{キョウサマ}？」

「そう」

そうして藍^{ラン}は帝の呪いを破壊した代償に自分にかかった呪いを解くために、強^{キョウ}と共に東の呪術師・賢^{ケン}の元に行くことになった。

いざ、東の緑森国へ

「飛んでいきますよ」

「飛ぶのか？」

「怖いんですか？」

「怖くなどない」

顔を引きつらせてそう言う強に、藍は微笑みかけ手を差し出す。

強が空を飛ぶことが苦手なのはわかっていた。しかし、一刻もは

やく元の姿に戻りたい藍は馬より、空を飛んでいくとことを選んだ。

「強様？」

手を握り返さない強に藍が首をかしげる。

すると強の顔がすこし赤らんだ気がした。

強様も男だもんね。

藍は以前の姿であればけしてありえない状況に心の中でため息をつく。

呪いにかかって数刻、絶世の美女になった藍への人々の態度は一気にかわった。男達はこぞって話しかけてきて、女性は遠巻きに藍を見ていた。

以前であれば用事がないかぎり、男性が藍に話しかけてくるなどありえなかった。女性は藍が自分たちの敵ではないと安心してるのか敵意のある視線でみることもなく、普通に話しかけてきていた。

まったく、たかが外見が変わっただけなのに。

絶対に早く元にもどってやる！

「ほらほら、強。見とれてないで」

藍がそう強い決心を固めていると、典がをニヤニヤと2人を見比

べてそう声をかけた。

「見とれてなどいない」

強は典の言葉にむっとして答える。

「はは。ま、強。とりあえず、中身は藍だから。襲ったらだめだよ」

「中身って!？」

「襲うだど?!なんてことを!」

「はいはい。そう凶星だからって怒らない。急ぐんだよね?」

凶星って、

中身って、

やっぱり典様は口が悪すぎだ。

元の姿に戻ったら速攻、村に戻ってやる。

「そうです。急ぎますよ。強様行きますよ!」

藍はぎろりと典を睨みつけると強の手を掴む。そして一気に空に飛び上がった。

「藍殿?!」

強は突然、足場を失い、妙な浮遊感を感じて恐怖心で顔を歪める。思わず藍の腕を掴みたくなったが、それをどうにか男の沽券にかけて堪えた。

「強。一応私の弟子だから、むらむらときても襲わないように」

「典!なんてことを言うんだ。お前は!」

「典様、言葉が過ぎますよ!」

なんてことを言うんだ。まったく。

藍は眼下に小さく見える典に鋭い視線を投げかける。

「はは。冗談だって。2人とも冗談通じないのかい?とりあえず気をつけていってらっしゃい」

「ああ」

「はい」

色々言いたいことはあったが、藍ランと強キョウはにこにここと笑顔を浮かべて手を振る典テンにそう返事をするだけに留まった。

「じゃ、行きますよ！」

藍ランは強キョウにそう声をかけるとその手を強く握った。

そして国一番の美女になった藍ランは強キョウを連れ、東の呪術師・賢ケンのいる緑森国に向かって飛んだ。

「強キョウ様、大丈夫ですか？」

緑森国に着き、地面に降り立つと強キョウの顔は真っ青になっていた。無敵の戦士といわれる強キョウのそんな弱点をみて、藍ランはなんだか楽しくなるのがわかった。

やっぱり人間、苦手なものがあるもんね。

あ、でも典テン様にはなさそうだけど……

「大丈夫だ。賢ケンの家に向かおう」

青ざめた顔のまま、そう答える強キョウに同情しながらも藍ランはうなずく。一刻もこの美女の姿から解放されたかった。

柔らかい肌、邪魔なくらい大きく胸、長い金髪の髪、普通であれば喜ぶ話なのだが、藍ランはこの美女姿が窮屈でたまらなかった。

強キョウもどうしても意識してしまいうらしく、飛んできるときも妙に緊張しているのを感じた。

ま、襲われることはありえないと思うけど。

「藍ラン殿。あの塔が賢ケンの家だ」

緑森国の森の中を歩きながら、強キョウが遠くに見える塔を指差す。

「結構遠そうですね。飛んでいきますか」

「…歩いて半刻もかからない。歩いていこう」

賢^{ケン}の家には歩いて向かうことにした。
賢^{ケン}の家に飛ぶという単語にぎよつとした強^{キョウ}に藍^{ラン}は同情を覚え、北の呪術師・

「強^{キョウ}様、賢^{ケン}様とはどういうお知り合いのですか」

『あいつならなんとか賢^{ケン}に頼めるかもしれない』と典^{テン}が言っていたので、藍^{ラン}は2人がどういう関係か気になっていた。

「お知り合い…、賢は俺の兄だ。母親が違うがな」

「あ、兄?!」

意外な答えに藍^{ラン}の声が上ずる。

でも兄なら、確実に元に戻してくれそうだ。

藍^{ラン}は早くも元に戻る可能性が高いことに気付き、嬉しくなっても微^ミ笑^{シユウ}む。

「強^{キョウ}様、先を急ぎましょう」

「そうだな」

嬉しそうな藍^{ラン}に強^{キョウ}は少しだけ複雑な顔になったが、軽い足取りで前を歩く藍^{ラン}の後を追った。

呪いが解ける時

「強！あれ？この麗しいお方は？さっつ、中に入って座って」

塔に辿り着き、木の扉を叩くと、強と同じ顔で黒髪のくりくり巻き毛の男が出て来て、藍の腕を掴むと塔の中に連れ込んだ。扉を締められそうになり、強がぐいっと無理に中に入る。

何？この人は？

藍は戸惑いながらも勧められた椅子に座る。

その男 賢は顔のつくりは強とほぼ同じで男前、その髪型が軽さを与え、強の兄というより弟に見えた。

「どうぞ。お茶だよ」

賢はにこにこ微笑みながら、藍にお茶の入った木製の湯飲みを渡す。

「強は自分で作れるだろう？」

賢はそう言つと藍の隣に座った。

「ちよつと」

「兄さん」

強が賢を睨みつけると賢は肩をすくめて立ち上がる。そして真向かいの椅子に座った。

「兄さん、あんた、宮に呪いを放つただろう？」

強はどかつと賢の斜めにある椅子に座るとそう口にした。

「……さあ、なんのこと？」

「とぼけても無理だ。この子は兄さんの呪いでせいでこんな姿になつたんだ」

「……こんな姿つて。こんな美女に？」

「ああ」

「大成功だ。うわああ。信じられないな。本当は帝か典を女性化したかったんだけど、全然成功だ！」

「…何が大成功ですか！喜んでないで元に戻してください！」

藍は大喜びする賢に対して、苛立ち交じりにそう叫ぶ。

まったく罪悪感、反省の色がない賢は信じられなかった。

「怒った顔も可愛いな。本当大成功。ねえ。君、僕と一緒に暮さない？君が望めばなんでも叶えてあげるよ」

「冗談！」

藍はそう叫ぶと、立ち上がり賢の胸倉を掴む。

「こんな姿、こんな姿、私は大嫌いなんです。元に戻してください！お願いします！」

「えー？どうして？すごく綺麗だよ。もったいない」

ぶちん。

藍はその能天気発言で自分の堪忍袋の緒が切れるのがわかった。

そして強には藍の表情が冷たく、その目に怒りが浮かぶのが見えた。

「藍殿！」

強が止めようと動くより先に、藍が動いた。

「！？」

賢の体が吹き飛び、壁に激突する。

「東の呪術師だか、なんだかわからないですけど、呪術師が死ねばその呪いが解けるのを知ってますか？」

藍の青い瞳が氷のように冷たい光を放つ。賢は壁からゆっくりと立ち上がりながら顔を引きつらせる。

「藍殿！」

強はこのままでは兄が殺されると思い、藍の前に立つ。

「藍殿。殺すのはやめてくれ。ふざけた男だが俺の兄であることはわかりがない。兄さん！藍殿に殺されなくなったら、素直に呪いを解くんのだ」

「…わかったよ」

藍と強に見つめられ、賢は肩をすくめると頷いた。

「飛ぶのか？」

「もちろん」

「強、もしかして怖いとか？」

「そんなことはない！」

「じゃ、行きましょう！」

「行こう！」

藍と賢は強の両脇に並び、その腕を掴むと上空に飛び上がる。

強は顔を引きつらせながらも、悲鳴を上げないように口を必死に閉じてその時間を耐えていた。

元に戻るためには典の協力が必要と、藍達は宮に戻ることになった。

「お久々。典」

宮の呪術部に到着し、典を見つけると賢がへらへらと笑いながら手をふる。典はあからさまに嫌そうな顔をした。

「どうしたの？打ち首にでもなりにきたのかい？」

「打ち首？なんで？」

「呪いをかけたのは君だろ？親切に私は何もまだ報告してないが、君がここにきたということは私が帝に報告しないといけないだろう」

ね

「報告?!それは簡便。ちょっとした冗談のつもりだったんだ。だって、ほら藍ちゃん、すごい効果だろう?」

「確かに…」

「確かにつてなんですか!早く元に戻してくれませんか!」

藍は小声で話す2人にブチ切れるとそう叫んだ。

「そうだね。じゃ、私の部屋に行こう」

典はにこつと微笑むと自分の部屋である呪術司室に藍達を連れていった。

「じゃ、藍ちゃんはここに座って」

「はい」

部屋の真ん中の椅子を指差され、藍は素直にそこに座る。

「呪いを解く方法はいたって簡単。元に戻るように呪いをかけるんだ。僕は藍ちゃんの元の姿が知らないから無理だけど、典なら覚えているだろう?」

「そうだけど。でもそんな簡単にとけるのかい?」

「だって、僕が放った呪いはそんな複雑なものじゃないよ」

「それにしても私の結界を破ったけど」

「そうそう、結構強力な呪いでしたよ」

「そう?」

「うん、そうです」

「藍ちゃんにそう言ってもらえて僕は嬉しいな。やっぱり元に戻る前に一度僕と…」

「兄さん!」

藍に抱きつこうをする賢の腕をそれまで黙っていた強が掴む。

「まったく。残念だ」

「残念じゃないです。早くしてください!」

これ以上話していたら典までそう言い始めるのではないかと思い、藍が苛立って声を上げる。

「はいはい。わかったよ。じゃ、典よろしく」

「ああ。藍、目を閉じて。少し痛いかもしれないけど。その時は」
めん」

「痛いつてー!」

「しっつ、静かに」

典にそう言われ、藍は仕方なしに大人しく目を閉じた。

典の呪いなど、受けたらどうなるか実際に怖かった。

痛いつてどれくらいなんだろう？

「行くよ」

典は深呼吸すると両手を重ね合わせる。そして呪文を唱え始めた。
賢と強は黙ってその様子を見ている。

「藍!」

その声が出て、典の両手から光が放たれる。

「!」

目を閉じてるがその光を感じ、藍は両手を握りしめる。痛みは感じなかった。ただ不思議な映像が頭の中に流れる。それは少し少年のような幼さが残る帝の姿であり、美しい銀髪の女性がその側にいた。

帝の正妻ではないよね？

帝の正妻は帝と同じ色彩の黒髪、黒い瞳の女性だった。

じゃあ、あれは？

光が消え、藍を包んでいた煙が窓の外から逃げていく。

「藍?!」

「あれ?」

典と藍の声に、藍は嫌な予感を感じる。そして目を開けるとまず、妙な違和感を感じた。

銀色の髪が見え、ほどよい大きさの胸のふくらみが見える。

明らかに自分の元の姿ではなかった。

「賢さん!」

藍は椅子から立ち上がると、ぎろりと賢を睨みつける。

「今度は別の姿になったじゃないですか!どうするんですか!」

「いやあ、その姿もかわいいなあ。今度の姿も好みだな」

「そういう問題じゃないです。もういいです。あなたを殺して、元に戻ります!」

「うわあ!待った、待った!」

銀色の真っ直ぐに伸びた髪をうっとしそくに振り払い、緑色の瞳に怒りを浮かべ、藍は手の平に気を溜め始める。

「藍!待ってくれ、兄さん、他に方法はないのか?」

「いや、だって、僕がかけた呪いであれば、その方法で簡単にとけるはずだよ」

「言い訳はもういいです。覚悟してください!」

藍が手の平を賢に向ける。

「藍!」

典が鋭い声で藍を呼び、藍は反射的に手を降ろす。すると溜めた気も消滅する。

賢はほっと胸をなでおろし、強は典を見つめた。

「藍。これは多分、賢だけの呪いじゃない。多分誰かがかけた呪いと賢の呪いが融合してできた呪いなんだ」

「ああ、だからかあ」

「誰かって、誰なんですか！」

自分だけの責任ではなかったと呑気な声を上げる賢を睨みつけ、藍は典を見る。

「その姿、心当たりがある。まずはこのことを帝に報告する必要がある。藍、一緒に来てくれるかい？」

「報告！打ち首は嫌だ！」

「賢、心配しなくても大丈夫。帝もそう乱暴な方ではない。ただ一つお願いすることがあるけど」

「何？」

「私の代わりに呪術司として宮に残ってもらう。私は帝を狙ったものを捕まえる必要があるから」

険しい顔をしてそういう典に誰も何も言えなかった。

藍も元に戻るどころか、別の姿になったことに怒り心頭であったが普段と様子の異なる典の様子に黙ってることしかできなかった。

帝を狙うもの

典が帝に緊急謁見を求めると、半刻ほどして帝と会うことができた。

帝は髪を結びあげ冠をかぶり、青と紫の着物を着て部屋の一番奥の大きな椅子に腰かけていた。通常帝の姿が外のものに完全に見えないように、謁見するものと帝の前に半透明の布が垂れ下がっているのだが、それは上に巻き上げられていた。そして帝の側にはお世話係などが通常いるのだが、すでに人払いをしており、藍は自分の変化した姿が帝の秘密にかかわることのような気がして緊張するのがわかった。

帝は典の姿を確認し、藍に目を向けると驚きで目を開いた。

「典、どういふことか説明してもらえぬか？」

「帝、今朝かけられた呪いを破壊した際に、藍の姿が美しい女性に変化したのを覚えてますね。私たちはそれが賢によってもたらされた呪いだと思つたのですが、呪いを解こうと呪いを再度かけたところ、藍は麗レイの姿に変化しました。このことから今回の呪いは賢だけではなく、麗レイの関係者よって作られたものだと考えられます」

「麗か」

麗？

聞いたことがない名前に藍が首を傾げる。

ああ、でも私知ってるわけないか

藍はそう一人で納得し、帝と典に目を向ける。二人の間にはどことなく緊張感が流れていて、麗という女性が二人にとって大事に女

性であることがわかった。

「麗は死亡したはずだ。あの時に」

「はい、私も生きているとは思えません。したがって、今回は麗本人ではなく、その関係者だと思えます」

死亡…。

すでに亡くなっているんだ。

なんだか故人の姿に変化しているって変な気持ちだ。

「帝、私はこれから藍を連れ、麗の村に向かいます。帝の警備は今回の呪いの責任を取ってもらい、東の呪術師賢に頼むつもりです」
「責任。まあ、賢であれば咎めないうもりであったが、典の代わりに警備をしてくれるのであれば有難い。賢であればお前の代わりが務まるう」

「はい」

咎めないって…

帝もいいのか、そんなんで。

まあ、あの人じゃ、絶対に国家転覆とか考えてないって言えるけど…

藍は賢の軽そうな笑顔を浮かべると、思わずため息をつく。

「藍？」

「申し訳ありません」

帝の前だったと、藍は慌てて口をふさぐ。

「すまないな。巻き込んでしまったようだ」

「巻き込むなんて。確かにいろいろな姿に変わるのが嫌ですが…」

「藍」

正直な感想を述べたせいか、典がめずらしく諫めるよう名を呼ぶ。
「典。咎めることはない。姿が変わるといふことはいろいろ不便で

あろう。すまないな」

「！そんな恐れ多い」

頭を軽く下げられて、藍はぎよっとする。

「帝。そんなに軽く頭を下げるものではありません。藍が調子に乗りますから」

「調子って何ですか！」

「藍。帝の前だよ」

藍はいつもの調子で典に返したことを気づき、無作法だった頭を下げた。

帝はその様子に苦笑した後、じっと藍を見る。その視線からなんだか切ない想いが伝わり、藍は視線を合わせることができなかった。

あの時の映像、帝と麗という女性は恋人同士だったのかな。

確かにそういう雰囲気はしてたけど。

死亡って、なにか秘密がありそうだ。

「帝。私たちは早速宮を出て、麗の村に出発するつもりです」

「そうか、気をつけるのだ」

「はい」

典は深々と帝に頭を下げると、背を向ける。藍は考えことから我に返ると慌てて典の後を追って、帝の部屋を後にした。

「典、僕にまかせておいて」

典の代わりに宮の臨時の呪術司になった賢は胸をばんと叩くとそつ言った。

頼りない。

限りなく頼りない。

そう思ったのは藍だけではないらしく、典も強も訝しげな視線を賢に向けている。

「そう、長くは宮を空けないつもりだけど。また帝を狙ってくるかもしれないから、頼んだよ」

「任せておいて。この僕は東の呪術師だよ。そう簡単に結界を破壊させないよ」

本当かな？

この人自分の呪いと他の呪いが融合したのもわからなかったのによく言うな。

「さあ、典。早く出かけたなら？日が暮れるよ」

「？そうだね。藍、行こう」

せかすようにそう言う賢に典は首をかしげたが、藍に声をかける。典、俺もいく」

呪術司室を出て行こうとする藍と典を強が呼びとめた。

「強？」

「強様？」

「俺も一緒いく。元はといえば、俺が藍殿を宮に連れてこなければこうなることはなかったし、責任を取るつもりだ」

「責任つて、私は君に頼んだことだ。責任を感じることはないよ」

「そうですよ。強様」

「あ、強、もしかして藍ちゃんが気になるとか？」

「?!」

「兄さん！」

なんてことを言うんだ、賢さん！

ふと藍が強をみるとその顔が少し赤くなっているような気がした。

「そうか、そういうことなのか。藍、大歓迎だよ。よかったね。好きになってくれる人がいて」

「それどーという意味ですか?!」

「っていうか、典様、失礼ですけど。」

「強様だって困ってるし。」

「あーあ、しょうがないなあ。可愛い弟のため、藍ちゃんは諦めるよ。宮にはいっぱい美人さんがいるから別の人探すかな」

「賢、その前に呪術司の仕事を優先するように。もし帝に何かあったら覚悟しておいてね」

「はい、典。わかってるよ」

「なんか、その方向で話が終わってるんですけど。」

「絶対に勘違いだと思っんですけど?」

「さあ、藍の未来の夫と義兄が決まったところで行こうか」

「だから、そんなんじゃないですよ!」

「典!」

「冗談だって」

「冗談なの?」

「そうして、銀髪の可愛い女性に変化してしまった藍は、誤解を生んだまま今度は典と強と共に、麗の村に向かうことになった。」

「くそっつ。完全に失敗だ」

「草、焦るではない。初めての呪いで帝まで届いたのが奇跡的だ」

「でも、殺すことはできなかった」

「焦るではない」

短い黒髪に緑色の瞳を持つ少年・草は口を尖らして、師匠の凜を見上げる。

凜は南の黄土国に住む呪術師で、南の呪術師と呼ばれていた。その姿は肩より少し短めの白髪に、真つ青な瞳を持った美しい女性だった。その冷たい印象のためか、氷の呪術者と呼ぶものもいた。

数ヶ月前に宮京で宮の警備兵と揉める草を見た。自分が帝の息子だと言い張り、警備兵の怒りを買っていた。かわいそうだと思ったのでいがみ合いに入り、草を引き取った。

話を聞けば、本当のような話であった。

そして証拠とばかり、数ヶ月前に病死した母の形見と帝が通常持っているお守りを見せられた。

年は14歳、15年前に帝が西の国に少数の供を連れ旅行した話を聞いてことがあった。ありな話ではなかった。

その話を恋人である空に話した。空はうれしそうに笑うとその少年を使い、帝を呪い殺そうと話した。

凜は反対した。しかし愛しい空に結局逆らえず、凜は空の計画に乗った。

そして空の指示通り、少年が帝を深く憎むように、帝のことを話をした。

少年は母の無念を思い、涙を流し、帝を殺すことを誓った。

凜は胸がえぐられるような思いをした。しかし、少年 草を助け、帝を呪い殺す手伝いをすることに決めた。

それから草は凜の弟子となり、呪術の修行を始めた。筋がよく、その腕はめきめきと上がった。

そして今朝、初めて帝に呪いをかけた。
呪いは宮の結界を破り、帝の側まで迫った。
しかし、呪いは消滅した。

「凜様？」

「なんでもない。次の呪いを考えよう。今回は結界が突破できたが、次回は難しいと考えたほうがいい。今度は結界が強力になっているはずだ。結界を壊すのは無理だろう。帝が宮の外に出ているときを狙ったほうがいい」

凜がそう言うと草はうなずく。

草に力を貸すことはなかった。それが草の願いであった。

一人で帝を呪い殺す。

草はそうは心に決めているようだった。

「宮京に向かおう。そうでないで帝の動きが見えない」

「わかりました」

草の素直な返事に凜は胸が痛んだ。

草は素直な少年だった。こんな少年をだましていることに凜は罪悪感を覚えていた。しかし、恋人の空には逆らえなかった。

宮京には空がいた。空に会えることは嬉しいことであつたが、草のことを考えるとそれは喜ばしいことではなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7596x/>

呪われたもの

2011年10月29日03時23分発行